

Title	子どもの育ちと絵本研究会主催 研究ワークショップ「ふれあい・ことば・あそび」報告（2015 年度 聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト
Author(s)	寺崎, 恵子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :45-46
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5415
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 年度 聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究会主催 研究ワークショップ 「ふれあい・ことば・あそび」報告



会場風景

6月6日（土）、聖学院大学体育館にて絵本研究ワークショップ「ふれあい・ことば・あそび」を開催した。さわやかな風を肌感じて、絵本が好きな親子たち、絵本と子どもの育ちに関心のある保育者や学生たちが集った。今年度も、舞踊家の加藤みや子氏（現代舞踊協会理事）を講師に、立花あさみさん、畦地真奈加さん、上村有紀さんをアシスタントにお迎えした。からだじゅうで読み、ことばとからだが変わり、皆が共にふれあい、まなびほぐし、充実したひとときになった。参加者は計61名と盛会であった。

からだを揺らし、はずませ、のびし、ほぐす。それから声を出してみる。声の長短・大小・高低・緩急・強弱は、ふだんは意識することのない地声の響きを身を感じるようになった。ことばは動きに揺さぶられて音に解体され、意味は無化する。意味から解かれてからだに生える声は、決して美声ではないが、確かに、自分の声である。「あ」の一音を一息にのびして、それぞれが様々な方向に歩いてみる。自分の発声と歩みに注意するなか、他の人の声が近寄ったり遠のいたりして聞こえて

きた。多様な一音が綾をなし、自分の声も織り込まれていくようだ。見えない綱を皆で一緒に思い切り引いてみる。それぞれの声がより合わさって〈声の綱〉になっていった。

グループワーク1では、谷俊治・谷川俊太郎・波瀬満子ほか『あたしのあ あなたのあ ことばがうまれるまで』（太郎次郎社、1986年）より、「て」、「おー」、「ころころりん」、「とんとんとん」を共に読んだ。各班で、ことばの音に感じるものを10メートル長の和紙にうつしてみる。子どもの方が自由である。大人は、何をどのように描こうかと考えて、自由に動けない。思い切って子どもに倣って一緒にやってみると、出来てきた。読むことばは様々な彩りの点や線による〈音の絵〉に表れた。絵と声とからだの動きは、ずれたり重なったりしながら組み合せて、アンサンブルになった。

ワーク2では、谷川俊太郎・望月通陽『せんはうたう』（ゆめある舎、2013年）より4編を共に読んだ。この詩画集の手触りには、手仕事のあたたかさが感じられる。本は当然読むものだが、実は触れるものであることに気づいてハッとする。作



講師：加藤みや子（上段右）

者に倣って、皆で描線を指でなぞってみる。おどろするような曲線の感触に、思わず声がゆれ動いてくる。ひとりの少年が読む。その素直なのびやかな声に皆が惹かれた。床に横になって母たちが幼い子を抱いて読む。その穏和な声は、わらべうたのように聞こえてきた。円座の中央に若者がひとりたたずみ、幼い子が歩み寄っていった。予定とは異なるその無邪気な出来事をも読み込んでいくと、和やかな多声はコロスのように聞こえてきた。

からだじゅうで読む。それは、自明とされていることをほぐして、ことばのもとをまるごとからだに感じて、ことばに遊ぶことである。ワークショップは、自然に皆がひとつの円になって終わった。あらゆる出来事をすべて包みこんでふれあうその不思議な雰囲気は、まつりに近いものだった。

(文責：寺崎恵子〔てらさき・けいこ〕聖学院大学
人間福祉学部児童学科准教授)